

蝶々に魅せられた男の話

初稿 1964, 加筆 2005, 参考画像挿入 2008-2014 : 島崎正美

札幌の蝶友 N 君は、すでにネットとおさらばして北大文類に身を納めていて、いぜんとしてネットをかついで野山を駆け回っている筆者に「まだ蝶なんか追っかけているのか？ 進歩の度合いがうかがえんな」というきびしい便りをよこしてきたが、この手紙を鼻先であしらって、いぜんとして蝶に託す筆者の夢は醒めることを知らない。

5 月も半ばとなって、南国情緒たっぷりにミカンの樹の周辺をナガサキアゲハのメスが悠然と舞うその美しさを N 君が一目でもみてくれたら、あんな手紙を書くことはないだろうし、ツツジの花が満開となる時期の五台山公園で、蝶道を形成して飛び交うモンキアゲハやクロアゲハ、カラスアゲハなどは見ているだけで楽しく、筆者の四季感はすべて蝶に支配されるほどになってしまっている。

一般のひとがチョウをみて春を感じるとすれば、菜の花畑に乱舞をはじめると白い舞姫がごときモンシロチョウや元気のいいアゲハチョウの飛翔を目にして初めて「春だなあ」となるだろうが、筆者が「ああ、また春が来た」と心の底からのどかな春を実感できるのは、乱舞するモンシロチョウに混じって、地表 1m かそこらの高さを、まさに地面と平行の位置を保つように、ヒラヒラと菜の花畑やタンポポの黄色、あるいは真っ赤なユスラウメの花の間を縫うように飛び交う、あの可憐ともいえるツマキチョウの姿を見出したときである。その名の如く前翅先端を白地に鮮やかな橙色紋で染め上げ、本当にかわいく、かつまた美しい蝶であるが、自然界にこのように可憐で美しいチョウが、春先、自分のすぐ目の前に舞っていることに気づくことなく、春は桜の花見よ、とだけで過ごしてしまっていることは、実にもったいない話である。



ツマキチョウ

このツマキチョウと同様に、春先にだけ現われて 4 月以降はまったくその姿を消してしまうはかなき命のチョウ：コツバメというのがいるが、このチョウに至ってはよほど観察力の鋭いひとでないかぎり、一生このチョウの存在に気づくことはないだろう。その大きさはブルーのヤマトシジミという小さいチョウの代表種なみで、翅表には地味な濃青紫色の鱗粉を配し、裏面の模様も地味ではあるがプロの芸術家でも舌を巻きそうな、それは見事な配色の味わい深いデザインが施されているのだが、からだ小さいうえにとてもすばやい飛び方をするために、通常、黒いハエが飛んだとしかみられない。早春の五台山公園山頂部に点在するアセビの白い花上や、ツツジの花群間をチラチラと飛び交うこのコツバメに、あるいは早春の山道を歩いているときに、パッと路傍の小枝などから飛び立つこのチョウに



2014/04/14
9:56

気がついた人がいれば、その人の注意力はきわめて優秀とって間違いない。このコツバメを、まだ肌寒い風がふきぬける3月中旬の山道などに見出すときも「春だなあ」と感無



量となるのだが、このチョウは止まっている間決して翅表の美しいブルーを見せてはくれなく左のような標本でのみ知ることができる。ソメイヨシノザクラが咲き誇って、美しい春型のアゲハチョウが勢いよく飛び交い始めると春もたけなわである。4月10日頃には五台山公園山頂部の陽

だまりに昨年の5月にチョウとなって以降、暑い夏には夏眠して、暖かい秋に少し活動したあと再び冬場を人知れずどこかでしのぎきってチョウのままでほぼ10か月を生き延びたヒオドシチョウが、これまでの忍耐の時期を振り払うように楽しげに飛ぶ。いかにも厳しい越冬態勢を強いられたことを示すように、その4枚羽の縁は例外なく擦り切れるように痛んでいて、5月に見られる新鮮個体の身震いするほどの美しさは跡形もない。初夏には好んで樹液に集まる習性のチョウであるが、春はサクラの花蜜を好んで吸い、山頂部の広場でオス・メスが競うように飛び遊ぶ。すぐ近くを飛ぶ際には、カサカサと乾いた羽のすれあう音が大きく聞き取れるが、その羽音がよけいにボロボロに痛んだ羽の状態を強調するかのよういきこえていじらしくなるのは筆者だけではないだろう。この越冬チョウ同士がこの時期にようやく交尾をして、エノキの小枝に200個近い卵を産み、やがてその一生を終えるというが、卵からチョウまでには寄生バエやハチ、クモ、小鳥など多くの自然界の外敵と戦いながら5%でもチョウに育てばいい方だから、母チョウもたくさんの産卵で対抗するよりほかないわけだ。

厳しい冬場をチョウで越して、春の訪れとともに活動を始めるチョウはタテハチョウ科が圧倒的に多いが、ヒオドシチョウがボロボロの姿で現われるのにくらべて、アカタテハ、キタテハやルリタテハは秋口に羽化した個体が多いせいなのか、それとも越冬場所が、例えばアカタテハであれば人家の軒下など、体に無理な圧迫のない姿勢で越冬できるチョウは羽の痛みがほとんどないようである。イシガケチョウも成虫越冬をして出てくるが、元来羽が丈夫でない種なので、越冬のために傷んだのかどうかは判断しがたい。いずれにしても、それぞれのチョウがどういう環境で越冬しているのかはいぜんとしてナゾが多く、いつまでも興味のある研究課題として残る。越冬前にはもっぱら樹液に集まるルリタテハが早春にはサクラや菜の花に蜜を求める状況はヒオドシチョウと同じで、季節ごとに蜜源が限られることを自然に会得している証左であろう。

タテハチョウ科にあつて早春に越冬蛹から成チョウとなって現われるのはスミナガシで、幼虫で越冬するツマグロヒョウモンやコムラサキの発生はやや遅れる。

5月に入って、先に記した黒いアゲハチョウ類がツツジの花群間を縫って舞い、ウルシやウツギの白い花上、あるいは藤色のセンダンの花などにジェット機のようなスピードで

美麗アオスジアゲハが群れとなって蜜を求め、その中に混じって、高知では特別天然記念物に指定されている、アオスジアゲハよりさらに美しいミカドアゲハが見られるのは5月初旬ゴールデンウィークの最中である。2000年以降の五台山公園山頂部では展望台近くで大木に育ったマルバチシャノキの白い花が鋭い芳香を放つ頃、この木のまわりにはアオスジアゲハ、ミカドアゲハ、イシガケチョウ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、ツマグロヒョウモンなどが群れ集い、公園管理事務所を取り囲むサンゴジュ垣根が発生源なのかどうか定かではないが、近年、美しいサツマシジミも観察できるようになってきたことが嬉しい(May 13, 2001: 五台山)。



人家庭先にヒヤクニチソウが花を開くと、里山のノアザミやウツギの花上にたわむれていたアカタテハやキタテハが、徐々に平地の庭先に下りてき始め、ヒオドシ色が鮮やかなヒオドシチョウの勇姿を目にするようになると、いよいよ夏が近い。

美しいピンクのネムの木の花を毎日のように競って訪れていたカラスアゲハやモンキアゲハ、ナガサキアゲハが、オレンジ色が濃いヒオウギから赤いカンナを経て、オニユリの花上に多く見られるようになって、春にはその美しい紅色を誇らしげに陽光に反射させていたベニシジミの翅表や、ロンドンでは最美麗種とされているというキアゲハの鮮やかな黄色にも夏型特有の黒ずんだ色が増して、ついにはオニユリの花が最先端部まで咲ききると、長かった梅雨があけて、まばゆい真夏に突入である。

7月にはチョウと涼をもとめて四国山脈の中央部に位置する海拔1400mの梶が森に遠征する。梶が森は四国でも指折りの昆虫の宝庫だ。海拔700mほどの中腹にある竜王の滝のすぐ上のクヌギの樹液が、同好者であれば誰もが知る国蝶指定となっているオオムラサキに出会える共通のポイントで、この蝶のオス翅表に金属光沢のごとく輝く濃紫色の美しさ



は、まさにえもいわれぬもので、毎年一度はこのオオムラサキに会いたくてもっばら7月下旬の登山を計画する。タテハチョウ科属では最大のチョウであり、この科特有の飛び方：滑翔は実に壮観で、頭上をこのチョウが滑翔していこうものなら、ときおりの羽ばたき音が「パタンパタン」とはっきりと鼓膜に共鳴するからたいしたものだ。中学校時代の仲間と登山すると、それぞれがけん制しあって誰が美麗オスをしとめるか、ポイントが近

くなるとそれぞれの登り足が早まるが、ほとんどの場合、愛宕中学校出身の大野浩君にやられてしまい、筆者はいぜんとしてこの梶が森では図体ばかり大きくて紫の輝きがないメスしかネットインできていない。オスに関しては、社会人となって東京で過ごした6年間に、山梨県日野春で存分に堪能する機会をえて溜飲をおろし、高知県産についても、父が小・中学校僻地教育に情熱を注いだ山村：吾川郡吾北村清水と物部村岡の内で、美麗個体を父と母がなかよくネットインしてくれており、とりわけ清水のオオムラサキは父自らが初めてネットを振ったという記念でもある貴重な標本で、大切に保管している。

竜王の滝をさらに登れば仏嶽寺である。この仏嶽寺周辺がこれまた昆虫類の宝庫で、寺の屋根を葺いてあるワラ束にミドリヒョウモンが水気を求めて飛来し、トイレ近くの地表ではキバネセセリが盛んに吸水している。筆者たちも負けずに冷たい水をゴクリゴクンと飲んで行程およそ4kmの登りで疲れたからだをいやす。ここらのキバネセセリは、後に、北海道で経験するような群れを成すほどの個体数はとても考えられなく、高知市を中心にチョウを追っている身には、このあたりで初めて確実に見られる稀少種だ。仏嶽寺周辺にはカラスアゲハやミヤマカラスアゲハがよく訪れるが、両種とも南方産特有の大型チョウで特にここで見られるカラスアゲハはミヤマカラスアゲハと雑交しているのではないかとおもわせるほどの美麗タイプとなる。仏嶽寺のトイレの周りにはコムラサキがよく集まってくる。低地産にくらべてこのあたりの個体の翅表は一段とムラサキが濃く、陽光に反射する濃紫幻色はオオムラサ



Aug.14,1980 梶が森 カラスアゲハ



Aug.14,1980 梶が森 ミヤマカラスアゲハ

キとはまたちがった美しさであるが、この美しいチョウとトイレの悪臭との縁の深さには参ってしまう。このコムラサキを採ろうとネットを操作する筆者たちの姿が傍目にどんなに映じようと、そこまで気をつかっているのは商売にならないのだから現実はきびしい。



Aug.12,1980 高知梶が森 アサギマダラ



July 27,1964 梶が森 アサギマダラ

仏嶽寺に向かって右手の溪流をわたって茂みの中、道なき道を分け入って進めば、少しばかり開けた草原に出る。あたり一帯にヒョドリバナの白い花が咲き乱れ、前翅に

真珠色の光沢を輝かせ、後翅の褐色模様との調和がとてもきれいなアサギマダラがゆるや

かな飛翔で舞っており、ヒョドリバナの花穂に垂れ下がるようにつかまって夢中で蜜を吸っている個体も多い。夢中だとはいっても、さすがに沖縄や八重山諸島で「バカ」チョウといわれてしまうオオゴマダラのような鈍感さはないようで、手で捕まえようとする敏感に察知して場所を変えてしまう。このアサギマダラは一度驚かすと、あれよあれよといっているうちに天空高く舞い上がり、どんどん小さく、ついには一点にまでなって空のかなたに消えてしまうという、たいした離れ業をやっている。アサギマダラは季節の変わり目にとんでもない距離を移動することがわかっているが、上空の気流に乗るのがうまいこの習性が役立っているのは間違いないだろう。この長距離移動に関する調査結果をインターネット検索で知ることができる。例えば、長野県白馬村で翅にマークを入れた個体が108日後に沖縄宮古郡伊良部島で再捕獲されたなどというすごい記録がいくつも報告されている。アサギマダラは斑紋異常が多くはないチョウだが1964年7月26日採集個体の左前翅には2箇所小さな黒点がある。

樹林帯につながる草原にふみこんでみると、ウラギンヒョウモンが次々と足元から飛び立ち、四方八方に散っていく。信州や北海道ではごく普通にみられるこのチョウも四国では山地性のチョウで1000m級の山に入らないとお目にかかれない。

雑草が茂るスロープをすべるようにして降りていくと、林縁に4,5本のハンノキが連なる場所に出る。夕刻5時頃をすぎた夕暮れ近くとなると、これらハンノキの梢を中心として、可憐で美しい森の妖精とも呼ばれるゼフィルスの類、ミドリシジミが翅表の緑色金属光沢を夕日に反射させてきらびやかな乱舞を展開する。

「さすがに高山にきたな」という感じがする瞬間である。信州や北海道では平地でもこういう光景を楽しむことができるが、四国ではこのような山深い環境でしか見ることが出来なく、それだけに感動も深い。



仏嶽寺にもどると、チョウとの戯れに夢中で少しも感じなかった空腹感が襲う。ここでの食事は自分たちでの飯盒炊さんが唯一の手段であり、お寺の一角で借用できるかまどを使った、火おこしから飯の炊き上げまでがじれったく、忍耐の長い時間が流れる。やがてうまい飯が炊き上がって、缶詰を切り開き、寺裏に急斜面で迫っているゴロゴロ八丁と呼称される崖道の闇にチラチラとみえるイブキボタルの情緒たっぷりな淡い光に目をやりながら熱い飯を口に運び、今日一日のさまざまなシーンを振り返って友とチョウなどの収穫について語り合う、梶が森ならではの楽しい時間となる。

寺内の板敷き簡易宿舎は明かりとしてランプがぶら下がるだけで、縁側でしばし狭い空間に輝く星空を眺めたあとは早い時間に床につくこととなる。いわゆる登山ではなくてチョウとの出会い目的の軽装重視で登ってきているわけで、寝袋などという便利な装備はなく毛布1枚をからだに巻きつけ、中学校時代に恩師：岡本盛康先生から教わった肌と下着の間に新聞紙を挟むという原始的ではあるがこれがかなりな保温効果を発揮してくれる

態勢を整えて、静かな一夜を過ごす。翌朝は深山の冷気に目覚めが早い。

登山2日目はいよいよ山頂に向かう。寺裏のゴロゴロ八丁から急峻な岩道を上るルートと、左手山斜面に沿った距離は長いが緩やかに高度をあげるスロープ経由ルートの2ルートがあるが、仏嶽寺の水場を越えて右手山側にガクアジサイの淡いブルーのかわいい花が咲き並ぶスロープをたどる。かつて、中学時代にここまでつれてきてくださった恩師：岡本盛康先生に教わった、ガクアジサイにはハナカミキリなど珍しいカミキリムシが訪れている可能性にも注意しながら進む。コガネムシの仲間洒落た美しさが目立つオオトラフハナムグリが、その黄色い派手な色のお尻を色っぽく天むけて突き出し「頭かくして尻隠さず」を地でいった、ザマな恰好で懸命に蜜を吸っている。長くて暗い林内の坂道をのぼるとようやく広い草原が開けてくる。山の頂上はまだみえない。草原に点在するノアザミをターゲットとして、あたりを無数のウラギンヒョウモンが乱舞している。土がむき出しとなった部分が登山道となっており、その道に沿って雨水がながれ、その湿り気をたよりにモウセンゴケが群生している。ときおり、路面からヒオドシチョウが驚いて飛び立つ。

山頂手前のキャンプ地水場で気持ちのいい冷たい水に潤いを求め、いよいよ山頂をめざす。晴れた夏の昼間に来ようものなら、高知市街に劣らず暑くてやりきれない山頂だが、朝早い出発で10時までに着けば、大田口側に急斜面で切れ込む谷間の方から、上昇気流にのった涼しい霧がひっきりなしに吹き上がってきて、汗まみれでたどり着いたとしても、たちまち気持ちのいい涼感につつまれる。この上昇気流にのって山頂へと吹き上げられてくるオオミドリシジミなどのゼフィルスやカミキリムシの類が、山頂広場周辺の灌木地帯に降り立ち、労せずして珍種をものにすることができる。特に、カミキリムシの類を拾うように採集できるのはここ山頂くらいしかない。四国ではめったにお目にかかれないスジボソヤマキチョウもここでなら出会いのチャンスがふくらむ。例のアサギマダラも気流にのってこの山頂にも現われるし、低山地の頂上部に集う習性の強いキアゲハも、低地にみられるような夏型の黒化タイプではない黄色が鮮やかな状態で、この山頂部を樂しげに飛び交っている。大型のミヤマカラスアゲハが、勢いよくこの山頂を頂点とした尾根伝いの蝶道を形成しているかのように飛びぬけていったと思ったら、再びどこからともなく現われる。このミヤマカラスをネットインしようと思つたが、スルリとかわされてネットを一振した当人が勢い余って草むらに転がり込んでしまう。チョウに肩すかしをくらってぶつ倒れるさまは格好悪いが、本人は結構それでも楽しい。

涼しい風をいっぱい受け、北側遠く青く連なる四国山脈の眺望を満喫できる山頂での居心地に不満はないが、チョウを追う環境としては単調なため、昼食タイムを含めて1時間も過ごせば十分で、仏嶽寺にむけて下りの準備に入る。帰路は急峻な下りのゴロゴロ八丁コースをとる。崖岩の多い長い急坂は、まわりに美しいモミジの木々がおりにあす絶景の間を縫って下っていく。ひんやりとした木陰環境を好むアサギマダラがこの急坂のあちこちで悠々と舞っている。あいかわらず真珠光沢のまじるアサギ色と、後翅の濃褐色のコントラストがすばらしく美しい。八丁というからおよそ900m弱の距離（1丁=60間=60×

1.8m=108m ; 8丁=108×8=864m), 延々と続く長い急峻なガンガラ坂の下りに, しだいに脚がガクガクとしてくる. 仏嶽寺にたどり着いて小便に立っても, いぜんとして脚がガタガタと震えて始末が悪い.

梶が森に別れを告げて高知市にもどるときさすがに暑さはかなわない. つい, 円行寺の奥地にまで入り込んで, 溪流に足をひたしつつ, 木の葉裏にベッタリと翅を広げた状態で張り付いて, いかにも「俺様は隠れているんだぞ. 見つけられっこあるまい」と得意げな, しかし, その習性を知り尽くす筆者たちには, 道化としか思えないイシガケチョウやスミナガシの愛嬌たっぷりのしぐさを眺めて過ごしたくなる (2000年以降, 高知市近郊では数少ないチョウの宝庫であったこの円行寺一帯に人工的な開発の手が入り, 希少種であったチャマダラセセリをはじめ, 多くのチョウの発生地が破壊しつくされてしまった. 低地でオオムラサキと出会うことができた唯一の場所でもあった).



やぶ蚊の猛襲を覚悟して五台山の中腹雑木林に入っていくと, カシ類の幹内に棲むシロスジカミキリがお膳立てした樹液食堂に, チョウ類としては, ルリタテハ, スミナガシ, アカタテハ, サトキマダラヒカゲ, コジャノメ, ヒメジャノメなどが, 甲虫類としては, 早朝であればコクワガタ, ノコギリクワガタ, ミヤマクワガタ, 稀にヒラタクワガタ, そして常連客の代表であるカナブン, アオカナブン, カブトムシなどが集っている. 木陰の多い独鈷水地帯に足を運ぶと, 大きな夏型のモンキアゲハが静かに飛び交い, 落ち葉のなかへと踏み込めばクロコノマチョウが驚いてヒョイヒョイと場所を変えて見事なその羽裏模様で落ち葉に擬態して姿をくらます. このチョウは秋型が特に大型でオレンジ模様も加わって美麗となるが, 夏型はお世辞にもきれいとはいえない単調な黒装束衣装のみのいでたちである. このあたりではススキを食エサとして生育しているため, 幼虫の食痕を目印に探せば, 透き通るように美しい蛹を見つけることもそれほど困難ではない. ススキを観察するなかで, 筒状に織り込まれたススキ葉っぱを目印とすればホソバセセリの幼虫や蛹を見つけることもできる. その成チョウ: ホソバセセリはススキが茂る林道周辺を遊び場としているが, 夜間に人家の明かりめざして飛びこんでしまう習性もある. 独鈷水にはスミナガシの食樹であるヤマビワが多く, いたるところに幼虫が独特の糞塔を形成しているのを観察できるし, 小さいヤマビワであればアオバセセリの幼虫が筒状に綴ってひそんでいるのを見出すこともできる. 飛翔時にキラキラと銀色を輝かせるウラギンシジミも多く, このチョウの銀の舞は数百メートルはなれたところからも観察できる.

さて, 五台山の麓一帯の人家庭にツマグロヒョウモンの訪問が多くなり, 畑のマメ科植物にウラナミシジミが舞い, コスモスの花上を転々とするセセリチョウの類が増加の一途をたどって, 裏山のカシ類の葉に, 可憐で美しいムラサキシジミが群れを成して乱舞し始めると秋が間近だ. 極暑の夏の期間, 一時姿を消していたモンシロチョウやスジグロシロ

チョウが大根などの葉にありついて、またぞろ乱舞し始める。独鈷水の小道沿いに咲くハギなどの花にはキチョウやツマグロキチョウが競って吸蜜している。カシやシイなどの常緑広葉樹林帯には、ムラサキツバメやムラサキシジミという南国特有のきれいなムラサキ



鱗粉を誇るシジミチョウがみられ、特にムラサキツバメは海拔 150m そこそこのこの五台山全域に豊産する。日が短くなって、すぐに訪れる夕暮れときには、ムラサキツバメの雄同士によるテリトリー争いが展開され、翅表のムラサキ色を輝かせてあちこちで追飛する。本種メスの翅表ムラサキは明るくて鮮やかであり、オスのそれは渋い黒ムラサキである。

五台山ではむしろ珍しいチョウの部類に入るが、名刹竹林寺近くのうすぐらい林のなかをゆったりと舞うアサギマダラに出会えると、しばらくはその優雅な飛翔をうっとり眺めることになる。

同様にテリトリーを張る典型種であるルリタテハも、その占有域への侵入者に対する追飛を繰り返して旋回する。ときには自分よりもはるかに体の大きい鳥までも追飛してしまうが、反撃をくらったらどうするつもりだろうか。栗の実を拾いに裏山に登ると、ヒョイヒョイと波打つようにクロコノマチョウがあわてて飛び立ち、数メートル離れた落ち葉の間にピタッと翅を閉じて静止する。長年鍛えた筆者の目をごまかそうとしてもそれはかなわないことだが、一般の人であれば、落葉間にじっとしているこのチョウを識別するのは容易ではない。色も形も落葉の一片のごときみごとな擬態を成すからだが、沖縄、八重山、あるいは台湾に棲息する有名なコノハチョウが、多くは緑の葉上に翅表を開く形で静止することが多くて、あの翅裏の擬態を発揮しえていないことを思えば、クロコノマチョウの殊勝さには敬服する。秋風が強くなって、巻き上がる砂塵に人間どもが悩まされ始めると、チョウは越冬という冬支度に入っていく。ウチムラサキなどの柑橘類やビワの大きな



葉っぱをよく注意すれば、折り重なった葉の間に雨風をしのげる位置の1枚の葉上に数頭から十数頭のムラサキツバメがぎっしりと体を寄せ合う

ように、やや斜め状態の態勢で静止して仲良く寒さをしのぐ様を発見できる。庭先のハマ

ユウの葉っぱを利用した集団越冬を観察したこともある。同属のムラサキシジミも同じく成虫で越冬するが、こちらはなぜか集団を形成することなく1頭単位でビワなど常緑樹の適当な葉っぱ上を選んで寒さをしのぐ。春のチョウのところで書いたように成チョウで越冬するのは圧倒的にタテハチョウ族であるが、その越冬の実態を観察できる機会はきわめて少なく、筆者の経験ではアカタテハが人家の物置に置かれたザルの内側に、ひっそりと直立不動の姿勢でしがみつくと静止して冬場をしのぐ様子を観察できた1例のみで、他のタテハチョウ類については全く観察経験がない。

アカタテハに限っていえば、春がくるまでぐっすり眠り込んでいるわけではないようで、冬の最中でも、日差しのある温かい日であれば、極端な場合、朝の陽光をいっぱい受けた屋根瓦の上で早くから日向ぼっこしやれ込んでいたり、やがて人間様が干しに出したフトンの上に移動して、こちらの方があったかくて気持ちいいよ、とご満悦だった



Jan.4,1979 五台山
ムラサキシジミ



Jan.4,1979 五台山

ムラサキツバメ♀

り、適度に気温の変化を読み取った活動をする。ムラサキシジミやムラサキツバメが同じように温かい日中に日向ぼっこをする姿を、正月休みの間にカメラ撮影した記録もある。

かように春から冬まで1年中の蝶の生活を知り、さらに未知なる課題を研究対象として追いつける筆者に「蝶のことを忘れろ」というのは所詮無理のある話であるが、札幌のN君に、わざわざ返事をして説明するつもりはない。



Jan.4,1979 五台山 ムラサキツバメ

「蝶をただ採集して標本とするだけが能ではない、研究の対象はいくらでもそこらにころがっている」と自然研究の大切さを教えてくださった、今は亡き恩師、岡本盛康先生にはいつまでも心から感謝し、課題をひとつずつ解決する努力を続けたい。